大分県人会、三つの節目祝う＝創立65、留学50、研修40周年＝「留学・研修制度の存続を」

生50年 * 第一研修員40年
65
50
40

６５、５０、４０のロウソクを立てケーキカット

　ブラジル大分県人会（四篠玉田イウダ会長）は先月２９日、サンパウロ市の宮城県人会館で県人会創立６５周年、留学生５０周年、研修員４０周年記念式典を開催した。式典には安藤隆副知事、井上紳史県議会議長などの母県からの来賓７人のほか、大分県人インターナショナル会員ら７人、野口泰在聖総領事、安部順二名誉総裁（連邦下議）など約３００人が参加し、盛大に節目を祝った。

　まず両国歌斉唱が行われ、インターナショナル会員の歌手平野トシさんが「君が代」を先導した。先没者への黙祷後、来賓が紹介された。

　四篠会長は挨拶で「本日の来場者、手伝いの人に感謝。留学生制度は５０周年を迎えたが、参加者はみな母県を好きになって帰国する。どうか制度を大切にしてほしい」と県費留学生・研修生制度の継続を訴えた。

　安藤副知事は「１１０年前に移民した日本人の努力が日伯友好の礎となり、日系人が大分県に愛着を感じてくれて嬉しい。四篠会長の言葉を知事に伝えたい」と語り、祝辞とした。その後広瀬勝貞県知事の祝辞を代読した。

　続いて祝辞に立った井上紳史議長は自らの出身である日田市から、１９１３年に１３人の家族が渡伯したことに触れ、「会場に豆腐作りで儲かったカジワラさんはいますか？」と呼びかけ会場を和ませた。

　祝辞では「ブラジル社会で地位を築き尊敬されていることに、衷心より感謝、敬意を示したい。来年は大分県でラグビーW杯が開催される。会場でブラジル国旗も多く見られるのでは。大分県人会の発展を願い、新しい交流を促進していきたい」と語った。

□□□